

関西の詩歌を扱う書店 佐藤博之

今月分より時評を担当する。

三月二十日、京都に「泥書房」という新しい書店がオープンした。四条烏丸または三条御池から新町通に少し入っていった京都通信病院前の、傘を開いたままでは通れないほどの細い細い路地の奥にその書店はある。この書店は現代短歌社（一般社団法人三本木書院）の一室であり、燕が泥を運んでつくる巣の様に、ここに来られた方々とともに少しずつ築いてゆく場をイメージして「泥書房」と名づけられたとのこと。書店には現代短歌社の刊行物はもちろん、他社の歌集・歌書や、古書も販売されている。併設のライブラリーには現代短歌社に寄贈された歌集・歌書や各結社誌などが揃い、入室料（三百円）を払えば自由に閲覧することができる。先日は私も、他結社の歌友の結社誌掲載歌を読んだり、各結社誌の特集企画を読み比べたりと、ゆったりとした雰囲気の中でなかなか他の場所ではできない贅沢な時間を過ごさせて頂いた。

京都では大きな書店が次々と閉鎖・規模縮小し、短歌などの文芸書や人文・社会科学を主に扱う老舗書店として長く親しまれていた「三月書房」が昨年実質的に閉店（週休七日化）してとても寂しく感じていたこともあり、泥書房の開店は京都の短歌好きたちの大きな希望となった。

また、大阪には「葉ね文庫」という詩歌専門書店がある。大阪メトロ中崎町駅すぐの「サクラビル」という古い雑居ビルの一室に葉ね文庫はある。この書店は短歌を中心とした詩歌などの新書・古書を扱う専門書店であり、同人誌や私家本を含め、豊富な品揃えが大きなセールスポイントとなっている。店を訪れた歌人や俳人たちの自作の詩歌作品を書いた短冊を展示しているのが、この店の名物である。その他にも壁面でのギャラリーのような小展示や、読書会・落語会などのイベントの開催もあり、多様な魅力を日々提供している。

葉ね文庫のこのような書店としての魅力に、多くの歌人が集まっている。店の一角のテーブルにはいつも何人かの歌人が短歌について語り合ったり、寛ぎながら買った本を読み耽っていたりと賑わっており、店の内外で歌人たちが交流を深める一つの社交場にもなっている。私もときどきその座に加わり、またこの書店を待ち合せ場所にして歌友と会うことがある。また、ふらりとこの店を訪れた際に、たまたま店にいた短歌仲間と長い時間店内で語り合ったすえ、そのまま呑みに行ったことも幾度があった。

関西にはこのように書店を超えた小さな書店が、短歌を愛する人たちの強い力になっている。もちろん、詩歌関係書籍を多く扱う大型書店も大阪・京都・神戸などの大都市にそれぞれに展開しているのだが、これらの小さな書店のもつ個性によって短歌を仲立ちとした大きな輪が出来ているように感じる。

・泥書房 原則年中無休 11時～19時
 ・葉ね文庫 火・木 15時～18時・19時～21時半

土 11時～21時半